

新島襄と時代サービス

石 川 健 次 郎

はじめに

- I 幕末の新島襄と時代サービス
 - II 明治初期の新島襄と時代サービス
- おわりに

はじめに¹

人は皆なんらかの形で、社会から与えられたサービスを楽しむながら、あるいはそれらを選択し、活用しながら生きていく。生命の維持に直接かかわる衣食住をはじめ移動(交通)、情報交換(通信)、医療、介護などに関するインフラサービスなど、どのような時代、社会にもそれは共通することである。つまり、食事をする、排泄をする、子孫を残す、何物かを身にまとう、どこかに住む、移動する、お互いに連絡を取り合う、医療を受ける、助け合うなどの人間の生活行動それ自体は超歴史的なものであるが、それを実現するサービスは時代限定的、歴史的なものである。これら社会(コミュニティ)から受ける時代限定的な諸サービスを「時代サービス²」と呼ぼう。

江戸時代の日本人も入浴はしたが、ボディシャンプーを使うことはできなかった、明治時代の日本人も計算(算盤)をしたが、電子計算機は使えなかった、大正時代の日本人も掃除をしたが、掃除用ロボットは使えなかった、昭和時代の日本人も電話・ケータイで連絡できたが、スマートフォンを使うことはできなかった、平成時代の日本人も新幹線には乗れたが、リニアモーターカーで長距離を移動することができなかった。これら新旧の、時代を画するサービスは、まさに時代限定的、歴史的なものといえる。

他方、人間は社会に対して自らサービスを提供する。ある意味では、サービスの交換、それが生活であり、その積み重ねが生活の歴史であるといえる。

新島については、彼が提供した教育あるいは宗教サービスについてはこれまで数多くの研究業績を以て、詳細に明らかにされている。本稿では、新島が社会から受けた時代

1 以下では、新島襄全集編集委員会編(1984~1994)『新島襄全集1~10巻』(同朋舎出版)に多く依拠するが、出典箇所の記載については『8巻 年譜編』の記述にならい、(全5:13)[全集5巻13頁の意味]と表記する。

2 本稿では主に日本国内での時代サービスのありようを考察するため、新島が外国にいた時期、つまり1865-1874年と1884-1885年の時期は考察範囲に入れない。

サービス、その中でも飲食物、移動手段、金銭その他を中心に観察することにより、彼の活動の軌跡を追ってみたい。それはまた当時の日本社会の一端に触れることでもあり、商品史³、風俗史、社会史、生活史といった研究分野とも連関する可能性がある。

また享受できるサービスは同時代人に等しく開放されているが、それを選択するには、経済力(所得)や社会的地位などによって格差が生じる。時代を遡及するほど、その格差は大きく、顕著となる。新島の生きた時代には、どのようなサービスが存在し、それを彼がどのように選択したのかを見ていこう。後に見るように、新島は移動の際に、人力車、汽船、汽車、帆船、馬車などを多用した。しかし新島が享受した交通サービスは、いまでは一般的な移動のサービスとしては表舞台から姿を消してしまったか、あるいは少なくとも現代人の移動の主役ではなくなった。逆にガス、水道、電気などのインフラをはじめ電化製品など新島が享受できなかったサービスは数えきれない。まさに新島が多用した交通サービスは、彼をめぐる時代(限定)サービスであったといえる。

なお新島の飲食物、交通、趣味に関しては、「新島にもし道楽があったとすれば、それは何であろうかという問いに対して、食道楽という答えがどこからか出てきそうである。新島は美食家ではなかったが、確かに食気はさかんであったし、地方へ出かけて行って土地の名物を口にするのが好きであった。絵をかくのも、鳥けものを射つのも好きであった。しかしマジメ人間新島の最大の道楽は、おそらく旅行ではなかったろうか。東海道線、山陽線の開通していない時期なので、交通手段は大部分船であった。関東方面へ出かけるときは、京都から神戸までは汽車、神戸で船に乗って船中2泊、横浜から東京までは汽車という順序であった。(中略)新島は、神戸、大阪と横浜とのあいだを、二〇回以上船でいったり来たりしている。八重(子)夫人の語るところによれば、船はいつも2等ではなく3等であった。(中略)3等の船室、特に食事は、新島にとってかなり苦痛であったと思われる。⁴」また「新島襄は(中略)キリスト教に入信するまでの少・青年期には(中略)酒やタバコも嗜んでいた。ただし、どちらかと言うと「甘党」であった、入信後、趣味は旅行、とりわけ温泉と鉱物採集。(中略)ついで狩⁵獵。」などの記述がある。

3 これまでは我々は、「今の日本人の生活は、商品(企業によって提供される財とサービス)によって支えられているといっても過言ではない。」【石川健次郎編(2004)『ランドマーク商品の研究』(同文館)(1)頁】というように表現してきたが、これは逆に、サービスというものが最初にあって、企業が提供するサービスの一つが商品ということになるかもしれない。つまりサービスが商品の上位概念であるかもしれない。

4 和田洋一(2015)『新島襄』(岩波書店)227~229頁

5 現代語で読む 新島襄編集委員会編(2000)『現代語で読む 新島襄』(丸善)62頁

I 幕末の新島襄と時代サービス

【飲食サービス】

新島の最初の手紙の中に⁶、食材サービスとして栗が出てくる。「(前略)且先達而ハ御地之栗被下置、誠以難有仕合奉存候、早速打寄頂戴仕候(後略)」(尾崎直紀(記)宛礼状)がそれである。

ここに出てくる尾崎直紀⁸(記)という人物は安中藩の城代家老で、父民治と母登美の媒酌人であった。この手紙は、父民治が代筆したものといわれており、父が手本を与えて書かせたものかもしれないとされている。江戸藩邸での暮らしのうちに尾崎から受けた好意を謝したものである。新島はこの尾崎に特別可愛がられ、非常になついていた。尾崎が藩主へ諫言(深酒と気まぐれ)したため安中へ城代家老として帰されるときに、新島は激しく泣いたという¹⁰。一方尾崎も新島の才能と人柄を愛し、将来の大成を願っていたものと思われる。この手紙で分かるように、家老の尾崎から新島家へ安中産の栗が送られてきたわけであるが、これを新島が食べたかどうか、「早速打寄頂戴仕候」とあるところから見て、9人家族(祖父、父母、4人の姉、1人の弟)が集まり、その一員としておそらく新島も感激して食べたことであろう。この栗が新島の食物記録のスタートである。尾崎との関係を少し詳しく紹介しておく、「彼(尾崎直紀)の膝の上で眠ってしまい、よく彼に抱かれて家に帰ったものであった。(中略)彼は先祖〔の墓〕や神社にお参りするのに、よく私を連れて出かけた。本当に私は彼になついていた。私をまるで自分の息子のよう可愛がってくれたからである。彼は乗馬の名手であり、弓術でも達人だった。そのうえ気骨のある人だった。藩主の極端なきまぐれや深酒に対して、彼は藩主をよく諫めたものだった。そのため藩主は、彼をそばにおくのを煙たがり、昇進という美名のもとに自分の名代にして、城下町の安中に追いやってしまった。私は父やその他大勢の人々と一緒に、あの大都会の外れまで彼を見送りに行った。最後のお別れをする時、私は激しく泣いた。彼もいくらか感傷的になったようだが、男らしくそれを抑え、私には愛情に満ちた感動的なほほえみを見せた。彼の別れの言葉は、「七五三太よ、さようなら。良い子になれよ。大きくなったら安中まで会いにくるんだぞ」であった。そして彼はお供の者たちに出発の合図をした。彼は多くの供を従え、駕

6 鏈田研一編(2004)『新島襄「わが人生」』(日本図書センター)の21~22頁に「最初の手紙」として尾崎宛の礼状を紹介しているが、追伸の「栗」については省略している。

7 (全3:3頁)

8 尾崎直紀(記)については、関口徹(2007)「安中藩家老尾崎の表記について:新島七五三太を可愛がったのは直紀か直記か」(『新島研究』98号)がある。

9 (全3:736)、鏈田研一編(2004)『新島襄「わが人生」』(日本図書センター)22頁

10 現代語で読む 新島襄編集委員会編(2000)『現代語で読む 新島襄』(丸善)9頁

龍に揺られて去って行った。私はひどく疲れ、落胆して父とともに家路についた。¹¹」また「尾崎直紀が帰国の際、父親と一緒に街はずれまで送っていき、さんざん泣いた¹²」ともいう。栗の返礼状は、敬愛する目上の人ひとからの贈り物であったため、感激して書いたものであろう。

それより以前にも1847(弘化4)年11月15日、「五歳の時、(中略)父[民治]はその時、腰にさす小さな刀を二本買ってくれた。また、その儀式で着用する立派な絹の着物一式も、買ってくれた。私は両親と祖父母に連れられて神社へ詣でた。帰りには¹³や小さなたこ、こまなどあらゆる種類の玩具を手持ないほど買ってもらった。」¹⁴といい、武士の子として可愛がられたようである。

続く食材サービスは、牛肉である。

文久2年(1862)11月28日に「大阪の町を訪れたが、そこではじめて牛肉というもの¹⁵の味わった」というものである。備中松山藩(安中藩の老家であった板倉勝静【最後の老中首座として有名な人物】)の快風丸(ニューヨーク製の洋式帆船180トン)に乗船し、備中玉島へ向けての航海中、大阪に上陸したときのことであった。この少し前頃から、新島は藩主(板倉勝明)、尾崎直紀、添川廉斎(漢学教師)らとの度重なる死別や祐筆職の代理、新藩主の護衛役などで人生の虚しさを感じ、憂鬱な精神状態にあった。その矢先、幕府の軍艦教授所で航海術の基礎理論を修得した経験を認められて、本家の松山藩主からの依頼により、安中藩主の命令という形でこの船の乗組員になれたのである。新島はこの江戸から岡山までの3ヶ月間(文久2年11月11日12日~同3年1月14日)の航海で十分開放感を味わい、そのために徐々に「家出」の決意を固めたようであった。これは新島のその後の人生行路を決する重要な初航海であったといえる。

このとき夕食としてはじめて牛肉を食べたと思われる。ただ新島は手紙で父の民治には牛肉を食べたことまで伝えおらず、やはり当時のタブーを破ることに多少とも後ろめたさがあったものと見える。もっとも大阪では早くから牛肉が広く食べられ始めていたようで、新島の経験の4、5年前に当時適塾の塾生であった福沢諭吉が大阪で牛肉を食べている。つまり「そのとき(安政4~5年[1857~1858])大阪中で牛鍋を食わせる

11 同志社編(2013)『新島襄自伝-手記・紀行文・日記-』(岩波書店)38~39頁

12 和田洋一(2015)『新島襄』(岩波書店)26~27頁

13 これは千歳飴であろうが、それについては「千歳飴 元和年中、大阪で初めて水飴を作った豊臣家の平野甚右衛門が、江戸へ出て浅草寺の境内で売りはじめたという。しかし、柳亭種彦は、元禄宝永のころ、江戸の飴売り七兵衛が、その飴を千歳飴あるいは寿命飴と呼んだのが初めと説明している。お宮参りにみやげとしたのは、千歳の名に由来するからであろう。飴が神社に結びつくのは、飴が供物であったからであろう。」(朝倉治彦・安藤菊二・樋口秀雄・丸山信(1973)『事物起源事典(衣食住編)』(東京堂出版)246頁)という記述がある。

14 同志社編(2013)『新島襄自伝-手記・紀行文・日記-』(岩波書店)31頁(全7:8)

15 (全8:13, 全10:36), 現代語で読む 新島襄編集委員会編(2000)『現代語で読む 新島襄』(丸善)15頁

16 (全10:31~33), 現代語で読む 新島襄編集委員会編(2000)『現代語で読む 新島襄』(丸善)273頁

所はただ二軒ある。一軒は難波橋の南詰、一軒は新町の廓の側にあつて、最下等の店だから凡そ人間らしい人で出入りする者は決してない。文身だらけの町の破落戸と緒方の書生ばかりが得意の定客だ。どこから取り寄せた肉だか、殺した牛やら病死した牛やらそんなことは頓着なし、一人前百五十文ばかりで牛肉と酒と飯と十分の飲食であつたが、牛は随分硬くて臭かつた¹⁷というのである。また「あるとき難波橋の吾々得意の牛鍋屋の親爺が豚を買い出してきて、牛屋商売であるが気の弱い奴で、自分に殺すことが出来ぬからと言って、緒方の書生が目ざされた。それから親爺に会つて、「殺してやるが、殺す代わりに何をくれるか」-「左様ですな」-「頭をくれるか」-「頭なら差し上げましょう」。それから殺しに行った。此方はさすがに生理学者で、動物を殺すに窒塞させれば訳けないということを知っている。幸いその牛屋は河岸端であるから、そこへ連れていつて、四足を縛つて水に突っ込んですぐ殺した。そこでお礼として豚の頭を貰つて来て、奥から鉋を借りて来て、まず解剖的に脳だの眼だのよく一調べて、散々いじくつた跡を煮て食つたことがある¹⁸。」ともいうのである。時間のずれで福沢と会うことこそなかつたものの、牛鍋屋の数がそれほど多くない時代であり、新島と福沢が同じ牛鍋屋で牛肉を食べた可能性は皆無ではない。牛肉サービスが東西の著名教育家を結びつけているのは興味深い¹⁹。また牛肉屋については、「(前略)幕末には、すでに大阪阿波座の徳松という人が、ペリー来航の一年前嘉永四年(一八五一)に、もぐり営業であろうが牛肉屋を開業している(『大阪府誌四』)。これはおそらく牛肉屋のもっとも古いものと思われる。」²⁰という。新島は福沢と同じように牛肉屋という新しい時代サービスを受け入れることによって、時代の移り変わりを実感したのではなからうか。

この航海の途中、大阪から父の民治への手紙を書いている。「廿八日(中略)荒新と申御用達之家江参り候処、最早日暮ニ御座候故諸々見物も致兼候得共、只々御堂のみ拝見物仕候、其より荒新へ罷帰一宿致、早朝御船へ罷帰候故虎屋の饅頭も喰兼甚残酷しく思レ候(後略)²¹」というもので、すなわち文久2年12月28日の夕方遅くに大阪に到着したため虎屋の饅頭も食べられず、宿屋に一泊し、翌朝早く船に帰つたというわけである。江戸にすむ新島が聞知っていたほど虎屋の饅頭は当時有名であつたらしい。とらやの饅頭については、「1777(安永6)年刊行の「富貴地座位」によれば、大阪の名物として「虎屋まんぢう」があげられており、「撰陽奇観」巻45によれば、茶の子虎屋饅頭切手を発行していたとある。ただし、「撰陽奇観」巻6および「撰津名所図絵大成巻

17 富田正文校訂(1983)『新訂福翁自伝』(岩波書店)63~64頁

18 同上、67頁

19 新島と福沢の比較を論じたものに、田畑忍(1941)「明治文化史上に於ける、新島先生と福澤先生」(『同志社新報』55号)がある。

20 朝倉治彦・安藤菊二・樋口秀雄・丸山信(1989)『事物起源事典(衣食住編)』(東京堂出版)108頁

21 (全3:7~8)

12]によれば、菓子に切手は(中略)もっと古く享保からの流行であったという。(中略)店の特製では、何としても大阪の虎屋饅頭が海内に轟いていた。その出島白砂糖製が一つ五銭した(普通の店では三銭で、二銭のものもあった。)虎屋では[文化の終り頃]饅頭切手を発行し、十箇を一枚とし、百箇なら十枚になる。江戸ではこんな数を定めず、饅頭の数は筆で書き入れ、また多くは饅頭切手を用いず、菓子切手で済ました。大阪でも虎屋の外に饅頭切手は発行しなかった。江戸ではどこの菓子屋も饅頭を製したが、大阪では菓子屋と饅頭屋は別になっていた。ただ虎屋のみ、両方を売った。以上は幕末頃の話である。(守貞漫稿)²²」また「饅頭の類は小麦粉で皮をつくり、白や黒の砂糖の小豆餡を入れたものである。(中略)店の特製菓子として大坂の虎屋の饅頭が全国に知られ、饅頭切手を発行し、一〇箇を一枚とした。」²³という記述もある。

後述するように、この航海時に知り合った加納格太郎から同じ快風丸で函館行きの話があることを偶然聞き、新島は船の所有者である本家の高梁松山藩主と安中藩主との間を幾人かの協力者に助けられながら調整し、結局乗船許可の取得に成功し、1864(元治元年)3月12日に品川を出港、4月21日午前5時に函館港に着き、午後の上陸したのであった。そこでの食材サービスとしては、レモネードがある。つまり同年6月14日「約束しておいた時刻に、私は外国人居留地で働く友人[福士]を訪ねた。その友人が、翌朝上海へ出港しようとするアメリカ船[ベルリン号]へ連れていってくれることになっていた。彼は外国人居留地で私を待っていて、温かく迎えてくれた。彼は真夜中の冒険に出かけるにあたって、一緒に飲むため温かいレモネードを作ってくれ、「危険に満ちた冒険に神経を高ぶらせてはいけない」と言った。²⁴、「指定されていた時間に私は外国商館に、アメリカ船までつれていってくれることになっていた日本人の友人[福士卯之吉]を訪ねた。その船は翌朝シャンハイに向けて出帆するはずであった。友人は私を待っていて、暖く歓迎してくれた。彼は深夜の冒険に二人が乗り出す前に飲むために、熱いレモネードを出してくれ、危険を前にびくびくしてはいけない、²⁵、「(前略)真夜中の冒険と一緒に出かける前に、あたたかいレモン水を作って飲ませてくれた。(後略)²⁶」といったものであるが、この文章自体英文で書かれているため、それぞれレモネードあるいはレモン水と翻訳しているが、そもそも当時日本にレモンはあったのだろうか。開港地の函館のため、だれかが持参してきたのだろうか。原文の英語では、「lemonade」²⁷と記されている。レモネードについては、「明治三十三年の「時事新報」に

22 笹川臨風・足立勇(1995)『日本食物史(下)』(雄山閣)208~210頁・352頁

23 渡辺実(1965)『日本食生活史』(吉川弘文館)252頁

24 同志社編(2013)『新島襄自伝-手記・紀行文・日記-』(岩波書店)62頁

25 (全10:43)

26 鎌田研一編(2004)『新島襄-わが人生-』(日本図書センター)60頁

27 (全7:24)

連載された日本風俗によると、（中略）夏季には氷店と称して氷を削りたるをコップに盛り之をレモネード²⁸其他の液汁を混和し売るものあり」とあって、（後略）²⁸とある。

レモンの日本伝来については、「日本に伝わったのは開国後の明治です。数多くの舶来品の中にレモンも混じていました。明治6年、ある外国人が静岡県²⁹の熱海に湯治に訪れた際、食膳に供されたレモンのタネを庭にまいたという逸話も残っています。」²⁹、また「19世紀後半（明治の初め）に、治療のため温泉町熱海へ来ていた「外国人」によってレモンの種がまかれた³⁰」とあり、「レモンの日本への伝来 1873（明治6）年³¹」ともあり、レモンの日本伝来は明治以降というのが定説のようである。レモン水については、「レモン水は明治六年頃から売り出した³²。」という記述があり、これも明治以降の食材サービスといえる。では新島が書いたレモネードとは一体何であったのか。新島はアメリカでレモネードなるものを知り、それを福士から与えられたものになぞらえたのであろうが、温かい柑橘類の飲み物なのだろうか。もしかすると甘酒かクズ湯の類ではないかと想像するが、今となっては不明で、食材サービスの謎として残る。

続く食材サービスとして酒がある。

新島の酒に対する態度、考え方については、「新島にとっては、酒をのまないこと、煙草をすわないこと、女色にふけられないこと、どなったり人の悪口をいったりしないこと、世間の人を見くだすような態度をとらないこと、そういうことがこの上もなく大切であって、純潔、清浄、自制、謙虚の模範を新島はアンドーバーの神学生一人ひとりの中に見ていたのである。新島自身、このような道徳的清らかさを、ただ求めるだけではなく実行し、日本に帰ってからは同志社の学生にも強制したのであるが、それにしても新島がどうして酒をあれほどまで嫌い、憎んだかは、今日の若い世代にとって、理解することは困難であろう。新島は、アンドーバーに移ってきてから、ミス・マッキーンに、江戸屋敷内で夜おそくまで漢書の勉強をつづけていたとき、藩主の座敷から「ドンチャン騒ぎ、そして芸者衆の歌」がきこえてきたと語っている。静かに勉強しようとしているとき、酒のみ、芸者を相手に大声でうたったりどなったりしているサムライどもにたいして新島はいまいますく思い、同時に酒というものにたいしても、そのころから悪感情をもち始めたのかもしれない。」³⁴という指摘がある。また「新島は、酒は悪いものであると固く思いこんで日本に帰り、同志社の学生に対しても、酒は一滴も飲ませ

28 渡辺実（1965）『日本食生活史』（吉川弘文館）292～293頁

29 三輪正幸（2012）『レモン NHK 趣味の園芸 よくわかる栽培 12 か月』（NHK 出版）11頁

30 北村光世（2006）『レモンブック』集英社、90頁

31 縄田栄治監修・柳原明彦著（2016）『調べてなるほど！果物のかたち』（保育社）43頁

32 笹川臨風・足立勇（1995）『日本食物史（下）』（雄山閣）487頁

33 『航海日記』（全5：37-38）、『函館脱出之記』（全5：69-70）、『箱橋よりの略記』（全5：72）に、函館脱出のいきさつが書かれているが、いずれも「レモネード」「レモン水」に関する記述はない。

34 和田洋一（2015）『新島襄』（岩波書店）98～99頁

ないという態度をつらぬいたのである。」とあるように、新島の酒嫌いはよく知られている。しかし前述したように、脱国前の新島は酒を嗜んでいた。例えば函館行きの中海難に会い、免れて砂子之浦に上陸し、勝浦で「宜き酒楼を選び、江戸製の「フロー」を上げ、一杯飲候時之心地、如何にも虎口を脱し候斗に思われ候（後略）」という記録が紹介されていたり、元治元（1864）年4月28日「武田塾へ参り、菅沼氏を他に誘引、縷々の談を為す事を望みしに、彼の人早速仕度し、予を導き、筆屋なる料理店へ行き、且つ上乘〔優秀〕の士二人を招き酒肴を調い、暫時觴を飛ばし、皆愉快を窮めしころ、（後略）」であつたりとか、同年「5月15日 快風丸も明日はサガレン〔サハリン〕へ至らん為、当港開帆するに依りて、船士林鍔太郎と別杯す。（後略）」というように事あるごとに酒を飲んだ。しかし他方、函館に至る船中の日記に、「各港のことを詳しく記述し、（中略）さらには人々の道徳的状況に関する個人的観察をも加えて書き記している。彼は飲酒と売淫が蔓延していることを激しく嘆き、単なる物質的の進歩だけでは祖国の繁栄を保障するのに十分でないことを確信して、キリスト教への渴望を深めていったことがうかがわれる。」とされる。

新島はこの函館在住の間に、未知の食事サービスである西洋料理にも触れた。つまり1864（元治元年）5月5日には、「（前略）朝四ツ時、胆附某の家に至り牛酪（バター）を求めしに果たさず。」とか同年5月7日には「（ロシアの病院では）一般的な食事は、牛肉の煮つけ、牛肉を細かくたたいて丸め豚の油で揚げたもの、あるいは卵スープ（牛骨を大量の水で煮こみ、ニラなどをきざんで入れ、それに塩少々を加えたもの）」とか同年「5月7（六）日 この僧官朝食を用いず、只志那茶に砂糖を入れ、両三の菓子を食べ計りなり。（後略）」といった状況を見聞したのである。

新島自身胃腸が弱かったせい、家族には柔らかで、消化のよい食材を摂るように注意した。例えば1867（慶應3）年3月29日の父民治への手紙では、「（前略）やわらかくて消化のよいものを召しあがり、お身体を清潔に保たれるよう切にお願い申し上げます。」とか、1867（慶應3）年12月24日の弟双六への手紙では「また七日か十日目には襦袢や褌を替えなさい。どうか虱を肌着の上に這わせることがないように。また菜漬⁴⁴けや沢庵のような消化のよくないものは一切食べないように。たびたび豚の赤肉を食べ

35 同上, 128頁

36 鍵田研一編（2004）『新島襄「わが人生」』（日本図書センター）49～50頁

37 同志社編（2013）『新島襄自伝－手記・紀行文・日記－』（岩波書店）96頁

38 同上, 100頁

39 （全10:52）

40 新島襄著 鍵田研一編（2004）『新島襄－わが人生－』（日本図書センター）51頁

41 現代語で読む 新島襄編集委員会編（2000）『現代語で読む 新島襄』（丸善）41頁

42 同志社編（2013）『新島襄自伝－手記・紀行文・日記－』（岩波書店）98頁

43 現代語で読む 新島襄編集委員会編（2000）『現代語で読む 新島襄』（丸善）77～78頁（全3:31）

44 「浅漬大根やたくあんは、落語の「長屋の花見」などにも見えるように、貧しいくらしにしばしば登

る必要があります。（後略⁴⁵）」といったものである。虱についての注意は理解できるが、当時の日本人（武士）は下着を1週間から10日も替えなかったのであろうか。新島は父には身体を清潔に保つよう伝えているが、当時の衣服の取り替え日数は、今から見ると少し長いように思える。時代は下るが、1885（明治18）年2月1日の妻八重への手紙でも「（前略）日本の悪癖としてとかく、姑は嫁によい顔をなさらぬこともあるかと思いますが、かえすがえすもお忍びお仕えください。とくに食物はお手伝いさんにまかせず、せいぜいご注意なさって柔らかい物をさし上げてください。」⁴⁶と伝え、逝去する前年の1889（明治22）年12月14日の八重への手紙でも「（前略）追々寒さも相増し候わば、御母上の方へはかの小さきストーヴでも御付被下、御部屋を成る丈け暖かに為し、又食物も甘き柔かき魚類をさし上げ、最早余り長き事も有之間敷候間、御病気の不為丈けに御馳走も御差上被下度、又クズ湯、水あめの類は御老体によろしく候間御差上被下度、（後略⁴⁷）」つまり「（前略）おいおい寒さも増し加わりますので、母上には例の小型のストーヴでもお使いいただき、部屋をなるべく暖かくして、また食べ物も甘くて柔らかい魚類を差しあげてください。もはや寿命もあまり長くはありませんので、病気に差しかえがない限り、ご馳走も差しあげてください。また、葛湯や水飴類はご老体によろしいのであげてください。」⁴⁸と常に柔らかい、消化に良いものを提供するよう伝えている。

胃弱と言えば、新島は1864（元治元）年5月24日に「マグネシア十二袋請取ル、日ニ三度ツ、のむなり」⁴⁹と記録している。これが現在下剤として使用されるマグネシウムのことであれば、新島自身も胃腸に問題があったことの証左である。これも時代を下るが、1888（明治21）年6月24日に「（前略）健胃剤を常に用い、鉄鉱水、即ち鉄の

、場するが、同時に武家の屋敷でも日常の重要な漬物であったといえる。ちなみに幕末の大根の漬物は一本一六文で、当時のそば一杯の価格にあたる。（中略）鯖（一枚）三〇〇文、鮪（一斤）400文、など魚介類の価格と比べ格段に安価である。」江原絢子・石川尚子・東四柳祥子（2009）『日本食物史』（吉川弘文館）141頁。また現在の栄養学では、「沢庵には、タンパク質、脂質、炭水化物、ビタミンB群（ビタミンB1、ビタミンB2、ナイアシン、ビタミンB6、葉酸、パントテン酸）、ビタミンC、ナトリウム、カリウム、カルシウム、マグネシウム、リン、鉄、亜鉛、銅、マンガン、食物繊維などの栄養が含まれている。」（香川明夫監修（2019）『七訂食品成分表2019』（女子栄養大学出版部）60頁）とされ、これらの成分は、「免疫力アップ」「疲労回復」「貧血の予防」「目の健康維持」「骨や歯の健康維持」「便秘解消」「精神の安定」「老化防止」「美肌効果」などの健康効果がある（実教出版部『カラーグラフ食品成分表（4訂）』（実教出版）162～174頁）という。「西欧では、（中略）ピクルスなどにも、日本のきゅうりの漬物やたくあん漬のような強い歯切れのものはない。（中略）歯切れがよいということは、よく噛むことになり、食欲中枢を刺激して唾液を出し、胃腸の働きを活発にし、消化を助けることにもなる。」と指摘されている。（小川敏男（1996）『漬物と日本人』（日本放送出版協会）183～184頁）

45 現代語で読む 新島襄編集委員会編（2000）『現代語で読む 新島襄』（丸善）83頁（全3：41）

46 同上、178頁（全3：328）

47 新島襄著 鎌田研一編（2004）『新島襄－わが人生－』（日本図書センター）283頁

48 現代語で読む 新島襄編集委員会編（2000）『現代語で読む 新島襄』（丸善）246頁（全4：266）

49 （全5：36）

溶解したる鉍水を要す。然し鉄は胃を弱からしむるの憂いあれば、鉍水にあらざれば不可なり。鉍水はミルクに混用すべし。」と記し、健胃に注意している。

【交通サービス】

この時期の交通サービスとしては、1862(文久2)年と1864(元治元)年の2回にわたる快風丸による航海であろう。新島は、1回目の岡山への往復の航海経験で「この航海によって私の精神的な視界は明らかに大きく広げられた⁵¹」と述懐したように、もっと自由な世界があることを実感し、そのために外国への脱出の決意を固め、その機会を狙うことになった。第1回目の乗船のいきさつは、「1862(文久2)年 同じ年の冬、私は玉島〔現、倉敷市〕という岡山の少し先の海港まで初めて蒸気船〔実際は帆船の快風丸〕で航海する機会を得た。その洋式帆船は〔備中〕松山藩〔板倉勝静〕が所有するもので、彼は私の藩主と密接な関係〔安中の板倉家の本家〕にあった。そのため彼は無償で乗船を許してくれた。江戸に戻ってくるのに三ヵ月あまりかかったが、私はその航海を心から楽しんだ。しかも、私が青春時代のすべてを過ごした安中藩主の正方形の囲い地〔江戸藩邸〕—そこでは、天というものが四角形で切り取られたほんの小さな一区画でしかない—私は思っていた—からはるか遠くに行けたのは有益なことだった。」⁵²というものであった。

第2回目の函館への航海が実現したいいきさつについては、「余、駿台川勝〔広道〕君の塾に寄寓し、航海書を読みしに、折々六ヶ敷所ありて如何にしても分り難き故、中浜万次郎を尋ね、その説を聞かんと欲し、その航海書を腰に付け、例の通り高下駄にてがらがらと駿台を下りしに、遙に冗然たる士人三名の来たるを見る。熟視すれば則ち我が知己、幹家〔備中松山藩の板倉家〕の臣加納〔格太郎〕氏、柏原〔一二三〕氏なり(他は未知に属するの人)。かの二人手を打ち、余に告げて曰く、「手船(美利堅〔アメリカ〕製のスクーネル)快風丸、函楯〔函館〕に至る為に四、五日内に、必らず開帆せん、汝函楯に到るの意、有りや否と。余躍りて曰く「これ我の素志なり、然れ共、期日甚だ近し、且つ主人及び父母の許さざるを恐る」と。「二君僕工夫を為さん」と云いつつ別れ、中浜氏を尋ねずして早速我が藩〔邸〕へ行き、飯田〔逸之助〕氏(飯田氏、当時目付役を勤めり)にその由を相談せしに、彼、我が厚く学に志すを愛し、喜びて曰く「我一度び汝の為に周旋せん、然れ共、預め成否を期すべからず」。僕ひそかに謂う、「この人然諾を重んず。必らず余の為に力を竭さん」と。遂に辞し去り、我家に至り、只幹家の船、箱楯に至る由を告げ、早々家を去り駿台に帰り、飯田氏の周旋如何んを待

50 同志社編(2013)『新島襄自伝—手記・紀行文・日記—』(岩波書店)351~352頁

51 現代語で読む 新島襄編集委員会編(2000)『現代語で読む 新島襄』(丸善)15頁

52 同志社編(2013)『新島襄自伝—手記・紀行文・日記—』(岩波書店)50~51頁

つ計りなり。これ実に元治元甲子年三月七日なり。扱この日の夕刻に至り、父一書を遣わして申せしに、「飯田氏の申すには、先ず幹家に行き、乗込みの事の成否を尋ぬべし」云々。但し父のこの書を遣せしは、飯田氏より父に右の一件を相談せしに依るなり。予思う「この事動もすれば成らん」と。

その夜の三更〔夜十二時頃〕迄に、箱楯に齋すべきと齋すべからざる物を別ち、而る後床に入りしに、心緒万端中々眠り難く、五更〔朝四時頃〕に至り暫時眠りしかば、最早箱楯に至りし夢を見けり。太陽未だ上らざるに已に目覚めし故、早々支度し幹家に至り、加納氏の家を尋ね行きしに、その戸前にて旧友塩田虎尾（幹家の臣に係る）に相会せり。故に共に加納氏の家に至りしに、彼、喜笑しつつ、「予、君命を受け、この度手船快風丸に乗り込み箱楯に至る」由を話せり。

予日く、「僕昨日その事を加納氏より聞けり。故に今日ここに至るはその事の為なり。僕曾て箱楯に至るを望む。君何ぞ君公に請い、僕をして帯櫃楯に至らしめざる。且つ僕思う、この度の行は実に失うべからざるの好機会なり」と。彼、予の志に感じ頗る骨折り、その老〔家老〕に請い、老より君公に請いしかば、君公殊の外、御賞歎有りて、早速御許し有りけり。故に疾走する事飛ぶが如く藩〔邸〕に至り、かの飯田氏に右の趣を告げ、深く周旋の義を相頼み、その翌朝の未明より又幹家に行き、出帆の期日を尋ぬれば、十一日と定まりたる由なり。

故にその事の由を飯田氏へ告げんとてその家に至れば、彼申すには「主公より内々箱楯行の許宥有り」し由を告げし故、喜欣に堪え兼ね、覚えず大声をして日く、「嗚呼、天、我を棄てざるか、我が業の成否この一挙にあり⁵³」。

つまり〔箱館行き作戦〕ある朝、江戸の通りを歩いていると、全く思いがけないことに〔前年〕玉島への航海の時に知り合った友人〔加納格太郎〕に出会った。彼は〔備中〕松山藩主の洋式帆船〔快風丸〕が三日以内に江戸を出港して箱館〔函館〕に行く予定になっていることを私に話してくれた。彼は私がまだ航海に興味を持っているのを知っていたので、「箱館までこの船で短期の航海をする気はないか」と言った。おそらく彼にとっては、あいさつ代わりに質問だったであろう。しかし、私にとってそれは、大いに興味をひく質問であった。彼は足早に去って行った。私もこの件では何もはっきりしたことを言わないで、先を急いだ。しかし、彼と別れたとたん、一つの考えが稲妻のように私にひらめいた。箱館に行くこの機会を逃してはならない。そこから外国への脱出を試みるのだ、というものだった。そうなると、問題は どうやってこの機会を利用するかであった。私の藩主が箱館のような遠隔地へ行く許可を与えてくれそうにもないことは、私には分かり過ぎるほど分かっていた。その時私は、目的を達成するためにもっともうまくいきそうな方法は、藩主や両親に言い出す前に、まず洋式帆船の持

ち主である、松山藩主の許可を得ることである、と考えた。

私は帰宅しないで、松山藩主に信任の厚い家臣〔川田剛か〕のもとに直行し、藩主の好意で箱館まで無償で船に乗せてもらえるようにとりなしてほしいとお願いした。私は以前からその家臣とは知り合いだったので、彼は喜んで会ってくれ、私に代わってすぐにその件を藩主にもちかけてくれた。

その時の松山藩主と取り決められた内容は、箱館に向かう自分の船に藩主が私を雇い入れ、次に安中藩主に私の渡航許可を願い出てください、というものであった。松山藩主は私のすべての要求を喜んで承諾し、職務免除の許可をとるために安中藩主に使者を送ってくださった。使者は安中の藩主から即断で承諾の返事をもたらってくるようにとくに言い含められていた。もちろん私の藩主は、松山藩主から出されたこのような特別な要求を拒否することはできず、その場で使者に承諾の答えを出した。これで私の問題はまんまと解決し、私が箱館へ出発するのを妨げられる者は、誰もいなくなった。⁵⁴」というものであった。

【金銭その他サービス】

新島は、函館から出国する際、どれくらいの金子を所持していたのだろうか。

そもそも新島家の収入は、「家長であり祖父である弁治の禄高と、父である民治との禄高は、ほぼ同額で、七五三太が生まれたころは、両方あわせて11両2分ほかに五人扶持と副収入、そしてこの禄高は、ちびりちびり増額はされたが、それだけでは一家はかつかつの生活しかできなかつた。」⁵⁵といい、1867（慶應3）年3月29日の父民治への手紙でも、「（前略）いたずらに母上の傍にいて、わずか6両2人扶持のために歳月を無駄に過ごすことになれば、天下の情勢を見分けたり、馬と鹿を区別するということができず、（後略）」⁵⁶と述べている。9人家族に月1両少しの収入では、決して裕福とはいえず、むしろ苦しい状況にあったといえるであろう。そのような状況の中、新島は函館行きにそなえて、金子を用意した。つまり「快風丸出帆の知らせを聞いた「二日後、私はいくらかの金〔24両－编者注〕と少しばかりの衣服、それにわずかな書物とを携えて家を出た。」⁵⁷といい、また「荷物づくりその他準備に追われたのは当然として、その準備の中には、金のくめんもふくまれていたであろう。日ごろからのたくわえなどというものは、ほとんどなかったの、とり急ぎ藩主をお願いして15両の金を用立ててもらい、まわりから餞別⁵⁸をもらったりしてようやく25両の金額をそろえることができたの

54 同志社編（2013）『新島襄自伝－手記・紀行文・日記－』（岩波書店）55～56頁。多少原文との齟齬があるが、紹介しておく。

55 和田洋一（2015）『新島襄』（岩波書店）20頁、（全3：737～738）

56 現代語で読む 新島襄編集委員会編（2000）『現代語で読む 新島襄』（丸善）75頁、（全3：31）

57 同志社編（2013）『新島襄自伝－手記・紀行文・日記－』（岩波書店）25頁

58 「文久二年（一八六二）、慶應四年（一八六八）の史料では、たばこ、海苔、わらじなど旅に必要な品々

である。」⁵⁹という記述があるが、「後に「脱藩」したうえでの函館行き、とされるが、実際は武田塾での修学を当てとする「離藩」である。藩から15両の修学料も貸与された。」⁶⁰ものだという。

そのようにして用意した金子も「予〔我〕れ不用の品物を売払い取得し金子二両二分、且つ我が持ちし金一両二分なる故、総計囊中の金子四両なり、扱て予家を出る時ハ、二十五両の金子を持ちしか、海路に長く日を費やし、時二港怪物に奪取られ、今は如此困窮し、物件等をうりよふやく四両の金子にあり付けり、嗚呼我なんぞ金に縁なきや、予、此金の内壱両壱朱を取り出し、前日宇之吉へ返却せし残金なる故、彼に返せしかば、彼は敢而取らず、予に強て返与せり」⁶¹という状態になり、結局新島の出国時の所持金は4両ということになった。長州藩の海外派遣5人には1人当たり1000両、幕府の留学生には1年間160両前後⁶²の金子が与えられたのに比べ惨憺たる金欠状態での出国であった。新島の出国時の写真の懐には、わずか4両の金子しか入っていなかったことになり、まして幕府や藩の保証（留学中の生活と帰国後の将来性）のない渡航であった点、大きな不安を抱いての門出となった。出国後も支出は続いたようで、結局アメリカ上陸時は「アルフェース・ハーディーとその妻は、日本からやってきた無一文の青年を、場合によっては助けてやってもいいと思ひ、（後略）」⁶³とか「言葉の通じない無一文の亡命客」という状態であり、1864年7月10日に「（前略）私は新しい船長にこう言いました。「ごらんとおり、私は全くの無一文ですが、アメリカへ行きたいのです。そしてたくさん本を読みたいのです。お願いですから、どうか私の目的を遂げさせてください」と。」⁶⁴告げねばならなかった。

新島はものの値段にも関心を示し、函館への航海中および函館での商況や商品について記録を残している。例えば1864（元治元）年3月29日に「平城 産物は石炭、藍染、岩城紙、それに傘などである（ただし傘の値段は非常に安価で、江戸では一分以上の傘がここでは八、九匁である）」⁶⁵とか1864（元治元）年4月19日に「霜風呂へ上陸し、（中略）焼酎至りて廉なり。一壺一升入りの価、金壱朱。（後略）」⁶⁶などを記録している。焼酎の値段について評価できるということは、普段から焼酎を愛用していたと考

ㄨ 物以外には、ほとんど金銭が贈られているから、餞別の内容が次第に金銭中心となっていくことがうかがえる。」江原絢子・石川尚子・東四柳祥子（2009）『日本食物史』（吉川弘文館）166頁

59 和田洋一（2015）『新島襄』（岩波書店）56頁

60 同志社編（2013）『新島襄自伝－手記・紀行文・日記－』（岩波書店）82頁

61 （全5：70）

62 和田洋一（2015）『新島襄』（岩波書店）3～4頁

63 同上、40頁

64 ミス・マッキーンが書きとめた言葉（同上、86頁）

65 現代語で読む 新島襄編集委員会編（2000）『現代語で読む 新島襄』（丸善）47頁

66 同上、35頁、（全5：8）

67 同志社編（2013）『新島襄自伝－手記・紀行文・日記－』（岩波書店）93頁

えられる。また函館商人の態度については、1864（元治元）年4月21日に「此地の風俗甚悪くして、町人物を売るに、客に向ひ喧嘩づらを為し、飽くまでも利を貪り、物の価は諸色高価なる江戸より二倍乃至ハ五倍なり、鯉節一本（江戸ニ而百文位）の価五百文位、汁粉一杯（江戸ニ而十六文位）位の価五拾文、（中略）然し菓子ハ思の外なり、江戸ニ而一分五りの者ハ此所にて二分五り位（但菓子の製造ハ決し而江戸ニ劣らざる也）○洗湯ハ入込ニ而其価九文なり（但此地ニ而やすき方ハ只洗湯ノミ）（後略）」と記録している。汁粉の値段については、「江戸の汁粉はすでに幕末に存し、夜売る商売も出現し、これを正月屋と呼び、一椀十六文である」とあり、新島の記録した値段と一致する。甘党であった新島は江戸で汁粉の値段に通じるほど常食しており、好物でもあったのであろう。⁷⁰ 汁粉については「（前略）江戸時代にも汁粉の人気は高く、そばやうどん同様、屋台で売られていた。（中略）店で食べるよりも安く、江戸時代後期には一椀一六文だった。串刺しの団子が通常四文なので、団子四本分の値段である。」⁷¹ とかまた「幕末江戸御膳じる粉平均5文」⁷² という指摘もある。1864（元治元）年5月21日には「（前略）牛酪菓子を求む。八匁5分なり。」⁷³ とともに記録している。

新島は決して余裕のある経済状況ではなかったにもかかわらず、他人に金子を貸している。1864（元治元）5月19日 晴「（前略）〇〇氏へ金参両壺分式朱貸す。」⁷⁴ と1864（元治元）年5月25日 曇「（前略）塩田虎尾君に壺両かす。」⁷⁵ がそれである。決着がついての出国だったのだろうか。

このような飲食、交通、金銭などのサービスを楽しみながら、新島は念願の出国を実行した。なかでも特に2度の帆船による交通サービスは、その後の新島の人生に決定的な影響を与えたものといえよう。

新島が函館に来て、いろいろな食材サービスと出会いながら、出国を決行した日の9日前、1864（元治元）年6月5日に京都ではあの有名な新選組による池田屋襲撃という事件が起きていた。これはやがて「（前略）[6月]14日、池田屋の凶報が届くや第三の家老益田右衛門介も上京と決定。十六日には長州入りしていた真木和泉と久坂玄瑞が忠勇・集議・八幡・義勇・宣徳・尚義の諸隊を率い、三田尻港を解纜して大坂をめざした。兵力千六百が強制退去と池田屋事件の遺恨を晴らし、京都守護職に復帰している松平容保を討つべく出陣したのである。」⁷⁶ となり、この毛利敬親・元徳親子の6月14日の

68 (全5:19)

69 朝倉治彦・安藤菊二・樋口秀雄・丸山信 (1989)『事物起源事典(衣食住編)』(東京堂出版) 183頁

70 後述するが、加納格太郎との再会の折にも、ぜんざいを喫している。

71 中山圭子 (2018)『事典 和菓子の世界』(岩波書店) 80頁

72 週刊朝日編 (1988)『値段の明治・大正・昭和風俗史(上)』(朝日新聞社) 203頁

73 鎌田研一編 (2004)『新島襄-わが人生-』(日本図書センター) 53頁

74 同上, 53頁, (全5:35)

75 同上, 54頁, (全5:36)

76 中村彰彦 (2018)『幕末史 かく流れゆく』(中央公論新社) 146頁

決定によって、7月19日の禁門の変へ発展し、やがて幕府による長州征伐の失敗、薩長連合、討幕、戊辰戦争、そして明治維新へと展開する大きな分岐点になったのである。このような1864（元治元）年6月14日の深夜、はるか約1600 km離れた函館の波止場から1人の日本人青年が未知の国へ船出したのであった。

II 明治初期の新島襄と時代サービス

【飲食サービス】

帰国後、新島は1876（明治9年）1月3日に山本八重と結婚した⁷⁷。結婚式後、「花むこの新島は（1876年）1月6日付けで手紙を書いているが、そこには「式典がお終わったあと、茶菓が出され、だれも彼も幸福そうなようすでした。それは京都に住んでいる日本人クリスチャンの最初の結婚式でした」ということばが見いだされる⁷⁸。」ということで食材としての茶菓が記録されている。「家庭では新島は夫人を「八重さん」と呼び、八重からは「襄」と呼ばれた。そのほか家事を手伝ったり、人力車を（に）夫人と同乗するなど、当時の学生たちの目には奇異に映った⁷⁹。」という。

その後、1878（明治11）年8月16日に静養先の洛西梅尾からの手紙に「干肉、卵、さつまいも、果物などはすべて用意されています。今こそ、ワイルド・ローヴァー号で身につけた、年期の入った技を見せる好機⁸⁰です。」と書き、様々な食材を紹介し、自ら料理の出来ることを知らせた。

そして帰国後、同志社英学校、同志社女学校の開設、同志社英学校の第1回の卒業式の挙行など着実に教育サービスの面で実績を挙げ、つづいて大学設立の意欲に燃えていた頃、新島は1880（明治13）2月7日から伝導を扶けるため、岡山に赴いた。その19日の夕方、旧友加納格太郎を備中高梁に訪ねた際、ぜんざいをごちそうになったという。その間の事情について、「夕刻ニせんさいの御馳走ニなり候而大笑ひを致し候、私東京ニ而松山侯の快風丸ニ乗り、箱館ニ参る時、加納様別杯ヲ為んと而料理屋ニ行く事を勧め申し候時、私ハ酒ハイヤ、しるこを呉れと申候は、別杯之代りニしるこを御馳走ニ相成候事ありしを加納様ハ御忘れなく、別るる時もしるこなれば又逢ふ時もしるここなすへしと而、其タハせんさいの御馳走被下候次第ニ候」（全3：171，全8：199）と記録し、新島として珍しく大笑いをしたという。汁粉という食材サービスがもたらした効用といえる。

このほか記録の中で多く出てくる食材は、鶏肉と鶏卵であるが、鶏卵については、

77 （全6：171）、（全8：152）

78 和田洋一（2015）『新島襄』（岩波書店）182頁

79 現代語で読む 新島襄編集委員会編（2000）『現代語で読む 新島襄』（丸善）191頁

80 同上、138頁、（全6：190）

1882 (明治15)年4月21日「鶏卵若干ヲ求メ、今橋壺町目真島氏ニテ板垣君ヲ見舞ヒ、鶏卵攪(撥)混器ヲ呈シ、君ノ眼前ニ於テ牛乳ト卵ヲ混化シ、之ヲ進メシカハ、君ハ之ヲ飲ミ殊ノ外喜バレタリ⁸¹」と記録されている。この板垣とは、いうまでもなくこの同年4月6日に岐阜で暴漢に襲われた自由党総理板垣退助のことである。なおこれは同日「早朝、古沢君ヲ訪ヒ、同志社大学設立ノ主意書ヲ委頼ス⁸²」とあるように、新島が古沢滋へ大学設立の主意書の執筆を依頼した直後のことであった。当時板垣は大阪今橋一丁目の真島(襄一郎)宅で療養しており、そこへ新島は牛乳と鶏卵を持ち込み、持参の攪混器でそれらを混ぜて飲み物として板垣に与えたところ、板垣は大変喜んだというのである。新島お手製の飲物は、今でいうミルクセーキ(Milk Shake)であろうか。新島と板垣退助との接点が卵と牛乳を混ぜたミルクセーキという食材で結ばれている点は興味深い。

これについては「鶏卵、牛乳、それに攪拌機まで持ち込み、ミルク・セーキを手ずから作って飲ますところなど、いかにも新島らしい。新島は日ごろ洋食党なので、ミルク・セーキは日常、愛用していた食品かもしれない。」⁸⁴という記述がある。新島と板垣の関係については、「いつの頃からか、新島氏は板垣伯と知り合っていた。」⁸⁵とか「それ(板垣遭難事件の見舞い)以前に面識がなかったとすると、両者を取り結んだのは土倉(庄三郎)かもしれない。土倉の紹介があれば、板垣とて新島を門前払いすることはできなかつたはずだからである。」⁸⁶とか「この古沢は「吉野の山林王」と称された土倉庄三郎と共に板垣と新島とを媒介する働きをしたものと考えられる。」⁸⁷といったものがある。また「明治七年の三月に、板垣退助は古沢滋をつれて、土佐に帰った。江藤新平の事件いらい、御用滞在という名目で東京に縛りつけられていたのである。」⁸⁸と、板垣と古沢の関係に触れたものもある。また「それまでに新島と板垣のあいだに、親しい交際があったことを証明する資料は発見されておらず、ことによると天津での対面は、全くの初対面であったのかもしれない。いずれにしても、政府にとっての危険人物、反逆者に、新島のほうから進んで接近したのは、けっして新島の気まぐれではなく、迫害されている者同士の共感と、自由を愛する者同士の連帯感がそこにはあったに相違ない。ミルクセーキのつくり方は、アメリカ滞在中に学んだものであり、攪拌機は京都の自宅から持参したものであろうが、十七、二十一両日の行動は、同志社社長新島が青年のよう

81 (全5:129)

82 同上

83 (全8:235)

84 本井康博(2005)『新島襄の交遊 維新の元勳・先覚者たち』(思文閣)214頁

85 鎌田研一編(2004)『新島襄-わが人生-』(日本図書センター)191頁

86 本井康博(2005)『新島襄の交遊 維新の元勳・先覚者たち』(思文閣)201頁

87 同上、213頁

88 榛葉英治(1988)『板垣退助-自由民権の夢と敗北-』(新潮社)64頁

に思いつめていたことを物語ってはいないだろうか。⁸⁹」と指摘するものもある。

「ただ板垣見舞いの件に関してこの直後に新島に「以前から板垣さんをご存知でしたか」と尋ねた者（村上太五平）がいる。彼によれば、新島の答えは、「いや、何も交際はないが、わが国のために尽くすという同じ志を持った人だから見舞った」であったという⁹⁰」

飲料サービスとしてのミルクセーキについては、「ミルクセーキ（英 milk shake）日本で創作された清涼飲料。シェイク・セーキともいう。シェイクには、揺り動かすという意味がある。牛乳・卵黄・砂糖・バニラに氷を入れて、よく攪拌して泡立てたもの。大正時代に、ハイカラ族が好む。アイスクリームを入れると、アメリカン・ミルクセーキになる。コーヒー・チョコレート・バナナ・ストロベリー・メロン・パイナップルなど、好みによりさまざまなセーキができる。⁹¹」というような記述もある。板垣は「（前略）斯くて府知事（建野郷三）差廻しの馬車に乗じて今橋なる真島襄一郎の家に入り、創痍を養うこと月余に及んだ。此間旧日向高鍋藩主秋月種樹来って君を見舞ふていふ、今回の遭難については先ずお見舞い申すよりも、お祝を申さねばならぬ。貴伝の唱ふる自由主義は、此変事に由って一層根深く天下に普及するであろうと。（後略）」⁹²と述べたという。残念ながら『板垣退助君伝記』には、新島の訪問については書かれていない。板垣が1か月以上も世話になった真島襄一郎は大阪の実業家で、製紙業と製糖業を手広く経営していた。ところが「東京の王子、有恒社について大阪における真島襄一郎の中之島製紙は、〔明治〕8年2月に操業を開始し、（中略）さらに真島は同13年に林徳左衛門経営の三田製紙所を買収するなど、洋紙の需要増加を見越して、漸次生産力を拡充したのであるが、（後略）」⁹³、「東京における諸物価の騰貴が甚だしく工場経営が益々困難となった為か、（中略）同年8月末には早くも前の持主の林徳左衛門に売戻すことに決めた。」⁹⁴また「真島の努力によって物になった蓬萊社の製紙部は、西南戦争後襲来した財界不況のため経営困難となったので、真島は遂に意を決し、明治15年8月住友家に金15万円で工場一切を売却した。」⁹⁵という。また真島は、1882年（明治15）7月には精糖業を再開するがまたもや洋銀相場が騰貴し製糖工場は翌月10日に閉鎖し、その後大阪府寄留の福岡県土族梅津諒助に製糖工場を譲り渡している。⁹⁶板垣が世話になった頃の真島は経営的に苦境の真っ只中であつたのである。

89 和田洋一（2015）『新島襄』（岩波書店）240頁

90 本井康博（2005）『新島襄の交遊 維新の元勳・先覚者たち』（思文閣）212頁

91 岡田哲（2013）『たべもの起源事典 日本編』（筑摩書房）704頁

92 宇田友猪（2009）『板垣退助君伝記』第2巻（原書房）257頁

93 成田潔英（1959）『王子製紙社史 附録編』（王子製紙社史編纂所）2頁

94 同上、18頁

95 同上、28頁

96 社団法人糖業協会編（1962）『近代日本糖業史』上巻（勁草書房）173頁。

牛乳については、「明治10年頃。牛乳は量り売りで桶かブリキ缶で運び、門前で柄杓で鍋に移した。」⁹⁷のであり、「牛乳配達夫は、浅黄色筒袖半纏の背に、アルファベットでミルクの文字を白く染めぬき、饅頭笠をかぶり、円形の塗り小箱に、ビールの空瓶五・六本を容れ、前後に吊り下げ、天秤棒を肩にし、五勺と一合の小椀の、竪に柄をつけたのと、小さい漏斗を携え、毎日需要家に備えた器物に量り込むという配達振りが、最初の型であった。」⁹⁸という。「牛乳の家庭配達が始まったのは明治14年(1881)である。(後略)」⁹⁹

鶏卵の値段は、1882(明治15)年鶏卵(100匁, 375g, 約6個)10銭¹⁰⁰であった。牛乳ほかの値段は、1882(明治15)年牛乳(180cc)4銭, 白米(1.425kg)1升9銭5厘, 醤油1升(1.8リットル)15銭, 味噌1貫(3.75kg)18銭¹⁰¹であった。新島がどのようなルートで鶏卵と牛乳を入手したのか不明であるが、比較的高価な鶏卵と牛乳を購入持参し、当時珍しかったであろう攪拌機で即座に作り、進呈するなど新島の思い入れの強さが感じられる。

板垣見舞いの後、明治15年(1882)7月7日「夏を迎えて、新島は教え子の横井(伊勢)時雄や徳富猪一郎(蘇峰)らとともに京都を発って、中山道を安中まで旅行した。(中略)新島はその後、日光を経て、会津若松まで足を伸ばしているが、(後略)」¹⁰²「四人の連中 徳富、奥、湯浅。予直ニ八杯ノ蕎麦ヲ喫セリ」と記録されている。そこでそば食い競争をし、新島が8杯の蕎麦を平らげたという記録が残っている。ただし「宿ノ婦人ノ談ニハ二十四杯ヲ食セシ者最大食家トナス。通例ハ十二三ヨリ十五六ニ至ル、八杯位ハ漸ク蕎麦食ヒノ入口ナリト。奥州人ニ大食家アルヨシ(二十二杯ノ客人)」¹⁰³とあり、新島の8杯などは蕎麦食いの初級者に過ぎなかったというわけである。蕎麦という新島の好物と教え子達との和気あいあいの雰囲気が伝わってくる。これも飲食サービスの効用というべきであろう。蕎麦については、「蘇峰が民友社を創立したときには新島はお祝いに大人の背丈ほど、かけそばを贈った。新島が学生時代のノートの余白にそばつゆのレシピを書き込んでいるのもおもしろい。」¹⁰⁴という。¹⁰⁵

97 北岡正三郎(2011)『物語 食の文化』(中央公論社)79頁、法被を着た販売人が、玄関でブリキ缶から主婦のもつ鍋へ牛乳を移し替えている絵図がある。

98 朝倉治彦・安藤菊二・樋口秀雄・丸山信(1989)『事物起源事典(衣食住編)』(東京堂出版)110頁

99 安達巖(1976)『日本の食物史』(同文書院)258~259頁

100 大川一司編(1968)『長期経済統計 物価8』153頁

101 同上

102 本井康博(2005)『新島襄の交遊 維新の元勳・先覚者たち』(思文閣)216頁、(全8:241, 全5:158)

103 (全5:149)

104 (全8:240)

105 (全5:149)

106 現代語で読む 新島襄編集委員会編(2000)『現代語で読む 新島襄』(丸善)60頁

【交通サービス】

1874年11月26日に、米国から帰国した新島は、翌27日に「新橋駅に着くと、ただちに外務省へ出頭し、帰朝の報告をした。それから板橋まで出かけて行って、そこで人力車を三台やとい¹⁰⁷、中仙道を通って上州安中まで走らせることにした。当時、汽車といえば、横浜と東京の間を走っているだけだった。人力車の上で新島は、やがて会えるであろう老父母の姿を目の前に浮かべ、見覚えの中仙道の晩秋のたたずまいを感慨深く眺めていたことであろう。人力車三台のうち二台は、アメリカから持って帰った荷物の運搬に当てられていた。新島は日本でにわかに流行し始めた人力車なるものを利用したのであるが、東京から安中まで車三台を飛ばすということは、普通の庶民には思いもおよばぬことであった。新島の貧乏書生としての生活は、田中理事官との視察旅行が始まるとともにおわっていたのである。ひた走りに走った人力車が安中についたのは翌二十八日の夜半であった。真夜中に両親の住居の戸をたたくことは差しひかえて、新島は安中町内の宿まった。そして翌朝も、両親にあまりにも大きな驚きを与えることを恐れ、最初に使いの者をおくり、そのあとに一〇年ぶりの親子対面を行なった。¹⁰⁸、「横浜にはひと晩と半日だけ滞在し、[十一月]二十七日には東京に行きました。その日の午後東京を出発して故郷に向かい、二十八日の深夜にこちらに着きました。食事以外は少しも休まずに二十時間人力車（人間の引く車です）の旅をしました。旅行用に備ったのは三人で、一人が私をのせ、二人は荷物を引きました。彼らは二十時間に五度食事をしました。食事ごとに約一時間使いました。十五時間で六十マイル走ったわけですから、一時間四マイルの速度です。」¹⁰⁹というように、新島は帰国直後の帰郷のために、人力車をフルに活用した。交通サービスの旺盛な享受ということになる。人力車の運賃については、「明治4（1871）年4月20日 東京の人力車夫心得規則で1里6銭2厘となる。」¹¹⁰と決められており、そのまま計算すると、東京-安中間の距離はおよそ120km（30里、中山道江戸からの距離）として、1台約2円、3台でほぼ6円、それに食事代その他を加えると8円くらいにはなったであろうか。当時の1人当たり実質個人消費支出が年81円60銭、月6円80銭¹¹¹であるから、ほぼ1人当たり1か月分の消費支出に当たる計算になる。「東京から安中まで車三台を飛ばすということは、普通の庶民には思いもおよばぬことであった。」という所以である。

107 もし日本で発明【明治2年和泉要助、鈴木徳次郎、高山幸助らが創案・完成、明治3年3月22日東京府より、人力車渡世を認可される】岩波書店編集部（1991）『近代日本総年表』（岩波書店）（40頁）された人力車という交通サービスがなかったなら、新島ほどのようなサービスで帰郷し、活動したのだろうか。人力車の誕生と消滅および社会的評価については、石川健次郎（2010）「ランドマーク商品の断続性：人力車の場合」（『同志社商学』第61巻6号）がある。

108 和田洋一（2015）『新島襄』（岩波書店）154頁

109（全10：208）

110 岩崎爾郎（1982）『物価の世相100年』（読売新聞社）20頁

111 大川一司編（1968）『長期経済統計 個人消費支出6』（東洋経済新報社）140頁

交通サービスの費用については、「新島は伝道のため、たえず人力車に乗ったり、船に乗ったりして動きまわっていたのでその交通費は(アメリカン・)ボードから出たであろうし、弟子たちが伝道に出かけるさいに新島が手渡していた交通費も、出所はボードであろう。(18)76年にでき上がった英学校の建築費は6500円、これにつづく女子校の建物も6500円、土地は土地でつぎつぎと購入しているので、京都府庁の「同志社設立以来の経費大略見込」は総計1万6147円、となっており、これら費用の出どころは、府庁の推定どおり、ボード以外にはないはずである。つまり同志社の経費の90パーセント以上は、まちがいなく太平洋の向こうがわから送られてきた金でまかなわれていたということである¹¹²」と指摘されている。

その後、1875(明治8)年8月25日に宣教師デビスの雇用確認のため「新島は、翌朝二人引きの人力車を雇って東海道を突っぱした。途中、四泊したのか五泊したのか、宿泊するごとにあら手の車夫を二人雇って走らせる。これが当時の超特急リレー方式であった¹¹³。」というが、人力車の乗車だけでもすさまじいほどの体力消耗であったであろう。「(前略)雨が降ると、車夫は一転、とげだらけのヤマアラシ然となる。麦わらのレインコート[みの]を着るためである。さもないければ、桐油紙製の妙なエプロン[前掛け]とマント[合羽]といった雨装束となる。そして車体のフード[幌]を引っぱり上げ、お客のひざに別の油紙製エプロンをくくりつける。夜道に行く人力車には、かじ棒に車夫の名前と登録ナンバーを記したちょうちんのお飾りがつく。ほたるの火のようだ。これが町の通りや、いなか道の暗やみを飛んで行く様は、日本人が画趣を愛することを表現するほんの一例に見える。日も暮れて郊外を走る車夫たちは、いろいろと注意を促すことばを口走って進む。道のわだち、穴、裂け目などがあつたり、交差点が近づいたりする時である。こうした叫び声は車列の前から後へと駆け抜けて行くが、それはちょっと音楽的でさえある。(後略)」という記録もある¹¹⁴。

交通サービスの汽船については、前述の板垣事件の際の動向が注目される。

「かくて君(板垣退助の一行は、十五日垂井に泊し、十六日は彦根に泊し、植木枝盛等大阪より来り合わせるため此地に同志の懇親会を催し、岐阜に譲らぬ盛況で、党勢の大に張るを見た。十七日君の一行は琵琶湖を航して大津に向った。古沢滋等の立憲政党员、大阪より出で、湖上の汽船(真宗丸会社の持船にて、立憲政党员岡崎高厚其社長たり)を催し、「自由万歳」と大書せる巨旆を比叡風¹¹⁵に翻して、君を迎えた。(中略)これより京都を経て大阪に著する数千の党员皆な梅田駅に歓迎し、蟻の歩みもできぬ状態であった。」

112 和田洋一(2015)『新島襄』(岩波書店)189頁

113 同上、173頁、(全3:140~141)、(全10:217)

114 エライザ・ルアマー・シッドモア著、恩地光夫訳(1986)『日本・人力車旅情』(有隣堂)16頁

115 宇田友猪(2009)『板垣退助君伝記』第2巻(原書房)256~257頁

新島は板垣が天津に到着する前に「正午に天津に着いて、彦根からの船（真崇丸）を待った。汽船会社に到着時刻と場所を聞くと、午後二時、石場の播磨屋という。新島は急いで昼食を喫し、（中略）板垣は昼食を済ませるとすぐに徒歩で石場駅に向かった。（中略）天津発三時十五分に汽車で一行は天津を去った。新島も同行した一人であった。一時間後に汽車は京都に着いた。（中略）二日後に今度は大阪にまで足を延ばして、板垣を見舞った。日記には簡単に「午後三時二十五分、西京ヲ発シ大坂ニ至ル、板垣ヲ見舞フ。」とあるだけである。（中略）この日、新島は帰宅せず、大阪に留まった。¹¹⁶」

ここでまず「真崇丸」¹¹⁷とあるのは、「真宗丸」の誤りである。原資料も「真崇丸」となっており、新島が誤記したものとも思われる。また板垣が乗る船は「真宗丸」でなければならなかった。それは板垣の伝記にあるように、「真宗丸」は（真宗丸会社の持船にて、立憲政党员岡崎高厚其社長たり）であったためである。その前後に「明治十四年には尚新たに海津に於て真宗社を組織して真宗丸外一隻の起工を為すあり、（中略）海津真宗社にありては同明治十五年二月第一真宗丸竣工西浦航路に就航し、引続き第二真宗丸の建造に着手せしため、両者間に又々競争を惹起したれども、同九月当時大阪商船会社発起人総理広瀬宰平の仲裁あり、太湖汽船会社に於て両船を買収の上参千円を提供して真宗社は解散することとなり茲に琵琶湖に於ける大型汽船は悉皆太湖汽船の所属に帰し、堅田以北太湖一円の船運は同社に統一せられたり。¹¹⁸」という紛争があり、結局「明治一五年九月 真宗丸二隻を海津井上某より買収¹¹⁹」ということで決着した。井上某より買収とあることから、社長岡崎高厚は雇われ経営者であったのかも知れない。この「岡崎高厚（一八五三—一九〇四）は 明治時代の実業家。嘉永六年伊予松山の藩儒高橋與庵の次男に生れ、同藩岡崎氏を嗣ぐ。少時藩校明教館、高知の知道館に入り、のち東京に遊んで法律を北洲舎に研究し、大阪組合大言人となってその副会長に挙げられた。のちに中島信行らの同志と共に立憲政党を組織して民権拡張に力め、傍ら大阪日報、立憲政党新聞、浪華新聞を主宰し、更に出版会社を起こして政治学の書を刊行した。この間また府会議員、市会議員となって府政、市政に尽し、また大阪商法会議所、神戸商業会議所、天津汽船会社などにあつて手腕を振ひ、明治三七年五月二十三日病没、年五十二。長柄墓地に葬る。」¹²⁰という人物であり、実はこれ以前に新島とも会っているのである。つまり1882年1月11日「此トキ中島信行、岡崎某、土倉ノ宅ニアリ、予漸〔時〕中島ニ面談ス¹²¹」とあり、これは新島が風雪の中、土倉邸を訪れ、5千円の寄

116 本井康博（2005）『新島襄の交遊 維新の元勳・先覚者たち』（思文閣）213頁、（全5：128～129）

117（全8：234）では、「真崇丸」と誤記している。

118 琵琶湖汽船株式会社 山田與三郎編（1937）『太湖汽船の五十年』（琵琶湖汽船株式会社）10～11頁

119 同上、65頁

120 下中弘発行（1990）『日本人名大事典』第1巻（平凡社）622頁

121（全5：123）

付の約束を得た時のことである。また「中島信行・岡崎高厚らの先客があり、この日は土倉に泊まる。」¹²²とあり、全集8巻では、「岡崎集」を岡崎高厚と明記している。

汽車サービスについては、佐々木義郎編(2000)『汽車・汽船資料・琵琶湖を挟む船車連絡時刻表(明治十三～二十二年)』(藤田卯三郎)6頁(明治15年1月4日朝日新聞付録時刻表)によれば、大津(現在の京阪浜大津駅)発3時15分、石場発3時23分、京都着4時17分となっている。板垣一行は、石場発2時53分、大津着2時59分の上りの汽車に乗り、いったん大津駅まで行き、大津発3時15分の下りの汽車に乗り継いだのであろうか。もし板垣が石場駅まで歩行したのであれば、なぜやがて大津駅から下ってくる石場発3時23分発の下りの汽車を待ってそれに乗車しなかったのか。大津駅では16分の待ち時間しかなく、レセプションその他の演説は不可能であったと思う。念のため佐々木義郎編(2000)『汽車・汽船資料・琵琶湖を挟む船車連絡時刻表(明治十三～二十二年)』(藤田卯三郎)11頁(明治16年7月30日、神戸大津間汽車発着時刻及賃金広告 官報第25号)によれば、下り大津発3時10分、石場発3時16分、京都着4時14分、上り石場発1時51分(3時51分)、大津着1時55分(3時55分)となっており、多少スピードアップされたようであるが、石場から大津へ、そして大津から京都への乗り継ぎはできなくなっていたようである。

佐々木義郎編(2000)『汽車・汽船資料・琵琶湖を挟む船車連絡時刻表(明治十三～二十二年)』(藤田卯三郎)6頁(明治15年1月4日朝日新聞付録時刻表)によれば、京都駅発3時10分、向日町発3時15分、大阪着4時55分となっている。また同書7頁(明治15年2月横井達之輔編『諸国道中記時刻表』)によれば、京都駅発3時10分、大阪着4時55分となっている。明治15年4月に時刻表の変更があったのであろうか。ちなみに佐々木義郎編(2000)『汽車・汽船資料・琵琶湖を挟む船車連絡時刻表(明治十三～二十二年)』(藤田卯三郎)11頁(明治16年7月30日、神戸大津間汽車発着時刻及賃金広告 官報第25号)によれば、京都発の下り列車は2時50分と4時50分で、大阪着4時17分と6時17分になっている。

本稿の「はじめに」で、「新島が大阪と横浜とのあいだを、二〇回以上船でいったり来たりしている。」ことを紹介した。新島が汽船という交通サービスを頻繁に利用したところ、つまり1882(明治15)年から1884(明治17)年にかけて、汽船業界で大きな競争が起きていた。

「躍進する三菱に対し、長州閥や三井系、関西財界が出資して明治15年に設立した「共同運輸会社」だ。共同運輸は三菱と競合する航路を次々と開設し、両社による価格競争が始まった。横浜－神戸間の運賃は5円50銭から55銭にまで下がった。」¹²³「斯くて

122 (全8:123) (8巻で全5:122とあるのは、全:123の誤り)

123 産経新聞特集部編(2004)『新ライバル物語－闘いが生む現代の伝説－ 第3巻』(柏書房)41頁

競争再開の結果は、両社共に條理徳義を没却し、損益得失を顧慮せず、相競ふの劇甚なる眞に惨状を極めたり。其最も甚しきに至っては、（中略）横浜・神戸の船客運賃は二十五銭に下がりたり。加之両社船は各々速力を競ふために汽罐を虐使し、烟突を灼熱して入港することすらあり。」¹²⁴という状態にまでなったが、政府は1885（明治18）年9月29日付で両社の合併を認可した。この日が日本郵船の創立の日となる。¹²⁵このような競争の中であって、新島は上京のたびに汽船サービスを享受したのであり、時には紛争による値下げ、待遇改善などの恩恵も受けたものと思われる。紛争の真っ最中であった1884（明治17）年2月18日（月）「尾張丸に乗る。運輸会社の船なり。五時出帆、（後略）」¹²⁶とわざわざ運輸会社の名前を記入したのもこのような状況を意識したものであるう。

【金銭その他サービス】

まず同志社英学校創立当初の金銭その他の数値を見よう。

1875年（明治8年8月4日「私塾開業願」）「月俸授業料として毎月三円を納しむ（但美味ヲ好ム者ハ別ニ之を求ベシ）通学生ハ授業料とし而毎月五十銭を納へし」¹²⁷というもので、当時の1人当たり実質個人消費支出が年84円41銭、¹²⁸月7円03銭であり、月3円の授業料は支出1ヶ月分の半額に相当する。1875年（明治8年11月29日）「（前略）入校生ハ僅ニ二十人ニ過キス」（同年十一月廿九日ノ調ヘニ生徒二十八人（入塾生十人、通学生十八人）¹²⁹）というものであった。「明治十一年廿九日ノ調べニ生徒二十八人（入塾生十人、通学生十八人）」¹³⁰となった。

また「1877（明治10）年ごろの同志社の授業料は、年額四円五〇銭、生徒数は女学校を加えて一〇〇名前後であったから、一年間の授業料収入は四五〇円で、それに対して新島社長の給与は年額八〇〇円、デビスら宣教師は一二〇〇円、独身の女性スタークェザーは六〇〇円ということになっていて、授業料収入では教師一人を養うことすらできなかつたことがわかる。宣教師はアメリカン・ボードから月給をもらっているのだから、同志社として実際の支出はなかつたわけで、一二〇〇円というのはかっこうだけである。新島もアメリカン・ボード日本国準宣教師に任命されているのだから毎月きまつた額をもらっていたにちがいないが、はたして八〇〇円であつたかどうかは疑わし

124 日本郵船株式会社編（1935）『日本郵船株式会社五十年史』（日本郵船株式会社）52～53頁

125 日本経営史研究所編（1986）『二引の旗のもとに』（日本郵船株式会社）34～43頁、また日本経営史研究所編（1988）『日本郵船株式会社百年史』（日本郵船株式会社）23～27頁に詳しい

126 同志社編（2013）『新島襄自伝－手記・紀行文・日記－』（岩波書店）212頁、（全5：260）

127（全1：4）

128 大川一司編（1968）『長期経済統計 物価8』（東洋経済新報社）140頁

129（全1：161）

130（全1：232）

い。そして新島が受け取っていた額の大部分、ことによると全部がハーディのふところから出ていた形跡もある。」¹³¹という指摘もある。1878 (明治11)年2月28日に寺島宗則へ出した手紙には、「学校の設立は明治8年であり、その時の入学者数はわずか10人を超えることはなかったのですが、明治9年になると60人になり、本年 (明治11年)はすでに百人を超過しました。」¹³²といている。また給与については、1878年「明治十一年六月 市原盛宏、森田久万人、山崎為徳氏之三人八月十五円ニテ同志社教員トなり、向後当社之為充分尽力する趣ニテ相談相調ヘリ 宮川氏女学校 十五円」¹³³。これについては、既に述べたように「教授兼幹事 (教育と実務を兼務) の月給は一五円、これは、若い独身者がかろうじて生活しうる金額であった。」¹³⁴という。時期は少し下るが、小学校教員の初任給は明治19年5円 (月俸)¹³⁵であった。「明治十六年二月十五日 日本教員ノ月給ヲ加増シ、且可成丈ハ其授業時間ヲ減スル事 市原氏ノ月給ヲ三十円トシ、(中略) 向後授業時間ヲ二時間トナシタキ事 下村氏ノ月給ヲ旧ニヨリ三十円、授業時間ハ三時ニ過キス 森田氏月給ハ当分二十五円トス」¹³⁶などの改革がなされた。

資産管理については、1884年 (明治17)年「明治専門学校創立規則」¹³⁷「第八条資本金ハ総テ公債証書ニ交換シ日本銀行大坂支店ニ預ケ置キ、其利子ヲ以テ本校ノ創立及ビ維持ノ経費ニ充ツベシ」とされた。

1884年 (「同志社英学校沿革」明治十七年一月調 「各級総員百五十人 徴兵免除ノ者七十二人」¹³⁸)で、免除されない78人は公立或は官立学校へ転校するなど、生徒は減少する恐れがあった。徴兵令発布以後生徒中殆三分一帰省 現員百六十四名 帰省人数四十名ヨ」という状態になった。¹³⁹

そこで「(前略) 一八八四年二月、徴兵猶予の特典を私学にも適用してもらうため、新島は東京に出張し、(中略) 二月十八日に田中 [不二麿] を自宅に訪ねた。(中略) 新島はこれまた大いに落胆した。田中の回答を端的に「無精神」と切り捨てる。「嗚呼天下ヲ患フルノ士ニアラス、自家保存ノ策ヲ為サルニ似タリ。御身カ大切、天下ハドウデモヨイ。」と断罪する。」¹⁴⁰、「この時の田中は参事院議長の要職に就いていて、年俸は四千八百円、新島の実に数倍という高給取りであった。」¹⁴¹という。「田中、森 [有礼]、それ

131 和田洋一 (2015) 『新島襄』 (岩波書店) 188-189 頁

132 現代語で読む 新島襄編集委員会編 (2000) 『現代語で読む 新島襄』 (丸善) 136 頁, (3:152)

133 (全1:312)

134 和田洋一 (2015) 『新島襄』 (岩波書店) 219 頁

135 週刊朝日編 (1988) 『値段の明治・大正・昭和風俗史 (上)』 (朝日新聞社) 577 頁

136 (全1:237~238)

137 (全1:100)

138 (全1:173)

139 (全1:168~169)

140 本井康博 (2005) 『新島襄の交遊 維新の元勳・先覚者たち』 (思文閣) 88 頁, (全5:259)

141 同上, 89 頁

に九鬼隆一をもつけ加えるべきであるが、これら三人は新島の晩年、いずれもそろって思想的、すなわち宗教的な転向を遂げ、キリスト教とは疎遠になる。この点は、新島、ひいては同志社にとっては明らかにマイナス材料であった。¹⁴²、「（前略）この前後のことであろうか、森は京都師範学校にも足を運んでいる。府庁の依頼で新島は校舎玄関で森一行を待ち受けることになった。「シガーを口にしたるまま、傲然として何等の会釈もなく、玄関を通過せる其傍若無人の態度」に新島は憤然としたという。その日、教え子（中略）に向かって「森は馬鹿者なり。たかが大臣の地位に処して、彼の尊大なる態度は何事ぞ」と息巻いた。」¹⁴³のであった。

教員の給料については「デビス、ラーネッド、ゴードンなど宣教師の教師は一律 100 円、ミス・スタークェザー、ミス・バーメリーは 50 円、ただしこれは同志社が府庁に対して届け出た金額であって、彼らの実収入はもっと多かったのであろうと想像される。（中略）新島社長の給料は、表面の額は年 800 円（月 66 円）ということになっているが、新島の実収入がどの程度のものであったかは、ちょっとやそっと調べたのではわからない。新島は、アメリカン・ボードから伝道旅行のために要する交通費、宿泊費を出してもらい、その金額を神学生たちに分配しているということがあり、アメリカン・ボード以外にハーディから生活費を送ってきているなど、金の出入りは複雑である。¹⁴⁴」という指摘がある。

おわりに

本稿の「はじめに」で、新島がガス、水道、電気などのインフラサービスを楽しむできなかったと述べた。最後に新島の経験できなかったサービスにつて触れておこう。

まずガスサービスについて。

今日においてガスは水道、電気とともに生活に欠かせないライフラインだが、熱エネルギーとして使われるようになったのは、明治時代後期になってからである。それもごく限られた上流階級の厨房にガスコンロが登場、庶民の目には触れることのない貴重品扱いの存在だった。こうした状況は大正時代も続く。一般家庭で使われるようになったのは、大正 12 年（1923）9 月 1 日の関東大震災がきっかけとされている。¹⁴⁵

ガス灯は明治末年ごろまで、文明開化のシンボルとしてその光彩を誇っていたが、大正にはいって、性能の優れたタングステン電球がようやく普及しはじめ、しだいに白熱ガス灯の領域を蚕食していった。（中略）しかし、戦争〔第 1 次世界大戦〕の終結とそ

142 同上

143 同上、102 頁

144 和田洋一（2015）『新島襄』（岩波書店）219～220 頁

145 森永卓郎監修（2009）『明治・大正・昭和・平成 物価の文化史事典』（展望社）302 頁

の後の深刻な不況のなかで、(中略) ガスの経済性にくわえて、薪用の“へつつい”をそのまま利用したガス火口の開発・取り付けのサービスが顧客に受け入れられるなど、熱用としてのガスの認識は高まっていき、また商工業用燃料としての販路も拡大されていった。¹⁴⁶ 本来我国のガス灯は、1872(明治5)年9月29日、高島嘉右衛門が横浜にガスの灯をともしたのが最初¹⁴⁷あった。その後「明治18年帝都はガス全盛時代となり、8、9年前には東京区内の瓦斯街灯の光も絶えなんとせしことありしが、江都の人間も世の開くるに従ふて、種油の明かりよりは石炭油の明かりが能くなり、石炭油の明かりより瓦斯灯の明かりが能くなり、瓦斯灯と電気灯は今競争中にて、上海にては此の頃瓦斯灯大に勢力を回復したりと聞く、(中略) 兎も角、今日の東京は瓦斯の時代と云ふべき者にて、瓦斯局の勢力年々増加せり」となり、明治24(1891)年には、東京市会では市内のガス灯を全廃して電灯に替えるという動きが表面化した。(中略) しかし、ここでいうガス灯と電灯の競争は(中略)都市部のことであり、農村部では依然として、石油ランプが使われていた、¹⁴⁹という。

このように日本におけるガス事業の当初は、灯火用としてであり、それが明治末年ころから電灯に替わりはじめ、その後ガスは熱需要に応える事業として成長していった。新島の生きた時代のガスは主に灯火用サービスであり、新島は熱源としてのガスサービスを¹⁵⁰経験することは出来なかったのである。

続いて電灯サービスについて。

新島旧邸には、新島愛用のランプが¹⁵¹残されているようであるが、国産のランプが販売されるようになったのは、明治5年ごろで、同30年代が全盛期で、大正初期にかけて全国的に使用された、¹⁵²という。日本の電球製造は、明治9(1884)年に東京電燈会社で製作したという記録はあるが、実用になるほどのものではなく、同23(1890)年藤岡市助と三吉正一とによる白熱舎の設立にはじまる。明治24年になって、漸く実用的なものが¹⁵³できるようになった、という。また点灯料金(23年4月)は「半夜灯」が8燭力85銭、16燭力1円50銭、「終夜灯」は8燭力1円45銭、16燭力2円50銭。「不定時灯」8燭力45銭以上、16燭力75銭以上、¹⁵⁴であったという。京都では、1890(明治23)年当時、疎水ができて電力を供給できたのは、鴨川以東の新工場地帯に限られ、そ

146 大阪ガス株式会社編(1986)『明日へ燃える 大阪ガス80年』(大阪ガス株式会社)23頁

147 同上4頁

148 文教政策研究会編(1996)『日本の物価と風俗130年のうつり変わり』(文教政策研究会)106頁

149 大阪ガス株式会社編(2005)『大阪ガス100年史』(大阪ガス株式会社)28頁

150 ガスの灯火用から熱需要への変遷の実態については、大阪ガス株式会社編(2005)『大阪ガス100年史』(大阪ガス株式会社)40~47頁に詳しい。

151 現代語で読む 新島襄編集委員会編(2000)『現代語で読む 新島襄』(丸善)208頁

152 朝倉治彦・安藤菊二・樋口秀雄・丸山信(1973)『事物起源事典(衣食住編)』(東京堂出版)399頁

153 同上、268頁

154 岩崎爾郎(1982)『物価の世相100年』(読売新聞社)29頁

の主なものは時計製造会社、藤井紡績会社、京都電燈会社であった¹⁵⁵、ということからも新島が電灯サービスを経験することが出来なかったことがわかる。

続いて水道サービスについて。

日本に（近代的－石川注）水道がひかれたのは、1885（明治18）年、横浜に鉄管による上水道を設備したのをはじめとして、21年に函館、24年長崎、28年大阪、32年東京と給水を開始した。（中略）主要都市の水道設備は明治末年にほぼ整備された¹⁵⁶、という。京都市では1912（明治45）年に水道が完成した¹⁵⁷。つまり1912（明治45）年3月27日、市中を掘り返しての水道管理埋設工事と、蹴上の浄水場建設工事が完成し、同年4月1日より市内配水が開始された¹⁵⁸、のである。よって新島は水道のサービスを経験することがなかった。

電話サービスについて。

我国の民間で電話がはじまったのは、1890（明治23）年12月16日東京千代田区丸の内（現在の工業クラブ）に電話交換局が設置され業務が開始された。この日こそわが電話事業の始まりである¹⁵⁹、という。ただ1889（明治22）年1月1日には東京－熱海間の一般公衆通話が開始され、1通話5分以内15銭、22年中の通話度数875、料金518円95銭¹⁶⁰であったという。このため新島は電話サービスも利用することが出来なかった。

このほか京都に限って見れば、京都市街電車が走ったのは日本で初めてで、1895（明治28）年であり、電車賃は1区2銭、半区1銭¹⁶¹、であったという。新島は京都の市電に乗ることはできなかった。

また新島が多用した人力車については、1909（明治42）年に人力車の車輪がゴム車輪となり¹⁶³、1912（大正元）年4、5月ごろには空気タイヤ人力車が登場した¹⁶⁴、という。これによって新島は堅い鉄輪の人力車に乗り続けたことになる。

新島は1890年1月23日に48歳で永眠して¹⁶⁵おり、現在からみればかなり若年死のように見えるが、当時の平均寿命からみて、どうであろうか。黒田俊夫によると、「明治から昭和の初期にかけての日本近代化の歴史の中で日本人の寿命を見ると、政府の生命

155 小野芳朗（2001）『水の世界史－「京の名水」はなぜ失われたか－』（PHP 研究所）162 頁

156 朝倉治彦・安藤菊二・樋口秀雄・丸山信（1973）『事物起源事典（衣食住編）』（東京堂出版）189 頁

157 小野芳朗（2001）『水の世界史－「京の名水」はなぜ失われたか－』（PHP 研究所）135 頁

158 同上、166 頁

159 朝倉治彦・安藤菊二・樋口秀雄・丸山信（1973）『事物起源事典（衣食住編）』（東京堂出版）271 頁

160 岩崎爾郎（1982）『物価の世相100年』（読売新聞社）29 頁

161 週刊朝日編（1988）『値段の明治・大正・昭和風俗史（上）』（朝日新聞社）377 頁

162 同上、379 頁

163 岩波書店編集部（1991）『近代日本総合年表』（岩波書店）200 頁

164 同上、212 頁

165（全8：viii）

表で見る限り、第4回生命表での低下を除くとかんまんな延長傾向がみられる。男を例にとると、19世紀末期(1891-1898年)42.8歳(第1回生命表)が第2回生命表(1899~1903年)では43、97歳、第3回生命表(1909~1913年)では44.25歳とわずかながら延びてきている。¹⁶⁶』ということであり、明治20年代の平均寿命はほぼ42歳くらいということになる。このことからみれば、新島は当時の平均寿命をほぼ全うしたように見える。しかし、以下で示すような新島と同じ天保14年生まれの著名人の歿年と比べると、幕末の長州藩士寺島忠三郎以外、新島より長生きしており、やはり新島は短命であったといえるように思われる。

安保清康：海軍中将－没年1909年(1巻111頁)、伊東祐亨：元帥・海軍大将－没年1914年(1巻313頁)、井上勝：鉄道創設家－没年1910年(1巻356頁)、桜井勉：官吏－没年1931年(3巻92頁)、品川弥二郎：政治家－没年1900年(3巻249頁)、斯波 蕃：男爵－没年1907年(3巻260頁)、坪井航三：海軍中将－没年1936年(4巻316頁)、渡辺千秋：宮内大臣－没年1921年(6巻565頁)¹⁶⁷

有地品之允、海軍中将－没年1919年(55頁)、内海忠勝：政治家－歿年1905年(170頁)、大井憲太郎：政治家、自由民権運動指導者－没年1922年(191~192頁)、西郷従道：軍人、政治家－没年1902年(484頁)、田中光顕：宮中政治家－没年1939年(702頁)、寺島忠三郎：幕末の志士－没年1864年(746頁)、弘瀬助三郎：実業家－没年1913年(942)、松尾臣善：官僚－没年1916年(1038頁)¹⁶⁸

新島最後の汽船サービスについて。

「1889年10月12日 同志社大学設立募金運動のため病身をもかえりみず、東上を決議し、神戸から船に乗りこむ¹⁶⁹」、「新島は十月十二日に神戸から乗船して東京に向かった。医師はその健康を気づかい、三週間以内という条件つきで旅行を認めた。これが新島の最後の京都出発となったのである。¹⁷⁰」

このようにこれまで新島の最後の上京の際には、汽船のサービスを受けたことになっている。綿密な裏付け調査の行き届いた全集編集者であるから、確たる証拠があるものと思われるが、時代サービスという面からは期待を込めて、新島は汽車を利用したのではないかを検討したい。東海道線全通は新島最後の上京前の明治22年7月1日である。乗車できる可能性はあった。新島の最後の上京は、明治22年10月12日に京都出発、13日に新橋駅近くの「対山館」に宿泊している。このように上京時の宿泊先が、新橋駅に近い対山館であること、それまで新島は、汽船サービスを活用する場合、多くは横

166 黒田俊夫(1978)『日本人の寿命』(日本経済新聞社)34~35頁

167 下中弘発行(1990)『日本人名大事典』(平凡社)、()内は巻と頁を示す

168 三省堂編修所編(1981)『コンサイス人名辞典-日本編-』(三省堂)、()内は頁を示す

169 和田洋一(2015)『新島襄』(岩波書店)297頁

170 (全10:443)

浜の宿舎（松木ノ屋、津久井屋、和田彦など）を常宿として利用していること、医師に3週間という条件付きで上京を許されるほど体調のすぐれなかった新島が、いくら慣れているとはいえ、京都から神戸、神戸から横浜、横浜から新橋という行程の汽船サービス¹⁷¹を選んだのだろうか。時代サービスに関心を持つものとして、汽船から汽車へ日本の交通サービスが変化しようとする、まさにその時新島が実際に汽船サービスから汽車サービスへ乗り換えたという妄想に拘泥せざるを得ない。

新島は、ガス（熱源としての）、水道、電気、電話という時代サービスを享受することなく、人生を終えた。駕籠から人力車・馬車へ、行燈からランプへ、飛脚から郵便へ、帆船から汽船へのサービス転換は体験し得たが、新しい交通サービスとして登場し始めた鉄道については、大磯から無言の乗車となったことは知られている。このように交通サービスをはじめ、インフラ関係の新しい時代サービスが頭をもたげようとする矢先に、まさに時代サービスの交代時期に、その間隙に新島は命を落としたといえる。しかし新島は後世から見れば、限界のあるさまざまな時代サービスを縦横に、多様に享受しながら、全力で使命の完遂に努力したといえる。

また新島はさまざまな時代サービスとともに、「人の好意」というもっとも得難いサービスを一身に浴びた人物であったといえる。記録に出てくるものの中で主だったものだけでも、加納格太郎、福土成豊、沢辺数馬、ハーディ夫妻、土倉庄三郎、富田鉄之助夫妻などの名が思い起こされる。またそういう形で、好意の、恩義の記録を残した新島の人柄の高潔さに敬意を表したい。

171（明治22年1月）「国内航路としては、近江丸が横浜と神戸とを往復していた。近江丸は2日に（の）正午に横浜に向けて出港し、6日に神戸に入港、9日に横浜に向けて出港、13日に神戸港へ、16日には神戸から横浜へ、20日に神戸へ、23日には横浜へ、27日に神戸へ、30日には横浜へと神戸港を7日ごとに出向していたことがわかる。神戸と横浜との往復に4日間の間隔で航海し、神戸には3日間停留していたことがこの表から読み取ることができる。」松浦章（2017）『汽船の時代と航路案内』（清文堂）7頁

172 八重夫人が新島の病状悪化の電報を受け、大磯まで駆けつけたのは、1890年1月19日20時05分京都発、20日午前11時26分大磯発（到着は数分前）の汽車であり、金森通倫や中村栄助らとともに、新島の遺骸到着以前に帰京したのは、1月23日18時49分大磯発、1月24日10時10分京都着の汽車であった。新島の遺骸は、1月24日8時09分（全8:577には8時08分とある）大磯発、1月24日23時20分京都着の汽車で運ばれた。このようにあとに残された人々は、汽船から汽車への交通サービスの転換に即応したのであった。（全8:574~577）、曾田英夫（2016）『発掘！明治初頭の列車時刻』（交通新聞社）152~155頁